

「鳥が出てくる本」

ツバメが巣をかけはじめ、カモの親子の行進が今年もニュースで流れました。毎年5月10日から16日は、愛鳥週間です。朝早くから、軽やかな鳥のさえずりを楽しめる季節です。

鳥の絵本というと、『こすずめのぼうけん』、『かもさんおとおり』などすぐにいくつも挙げられるでしょう。主役でなくても、大切な役どころで描かれている本もたくさんあります。

『もじゃもじゃあたまのナナちゃん』



神沢利子ぶん 西巻茅子え 偕成社 1985

髪の毛をとかすのが大嫌いな女の子が、頭の上でヒバリの卵をかえます。『フライパンじいさん』を連想します。小さな娘が家出したのに、原因のブラッシングにこだわるおかあさん、優しいけれどちょっとピンとのずれたおとうさん。無事に卵がかえって、しっかりもののナナちゃんも帰ってきます。

『おひさまのたまご』



エルサ・ベスコフ作・絵 石井登志子訳 徳間書店 2001

森を探検していた妖精は男の子が落としたオレンジを「おひさまのたまご」と思い込んでしまいます。明るい日の光に憧れるあまりの思い込みかもしれません。ふくろう、からす、ツグミなどいろんな鳥や森の様子が細やかに描かれています。

『アンジェロ』



デビッド・マコーレイ作 千葉茂樹訳 ほるぷ出版 2006

壁ぬり職人のアンジェロの仕事は教会の壁をなおして、塗り変えること。助けたハトに支えられて、厳しい仕事を毎日こなしていますが、だんだん年老いて仕事もはかどりません。やっと仕上げたとき、彼のきりがかりは、残していくはとのことでした。

『えほん北緯36度線』

小林豊 ポプラ社 1999




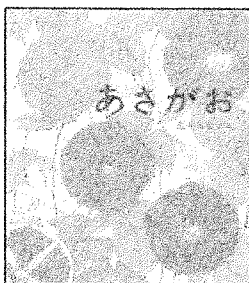
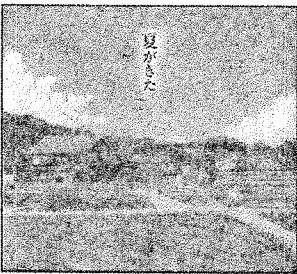

自転車に乗った二人の少年と1匹の犬は、大きな鳥に導かれ、北緯36度線上を東京から西へ出発する。同じ緯度にどんな国があるんだろう。「せかいいちうつくしいぼくのむら」のバグマンの村も通る。ヤモもおとうさんも元気にさくらんぼを取っているようだ。自然もそこでの暮らしもそれぞれ違うが、大きな鳥の目で見渡してみると、人が地面にひいた線など越えて、綿々と続いた世界であることがわかる。

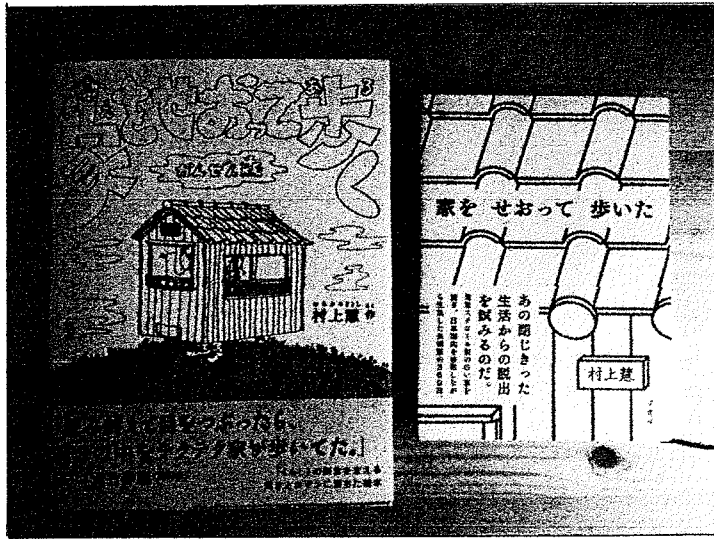
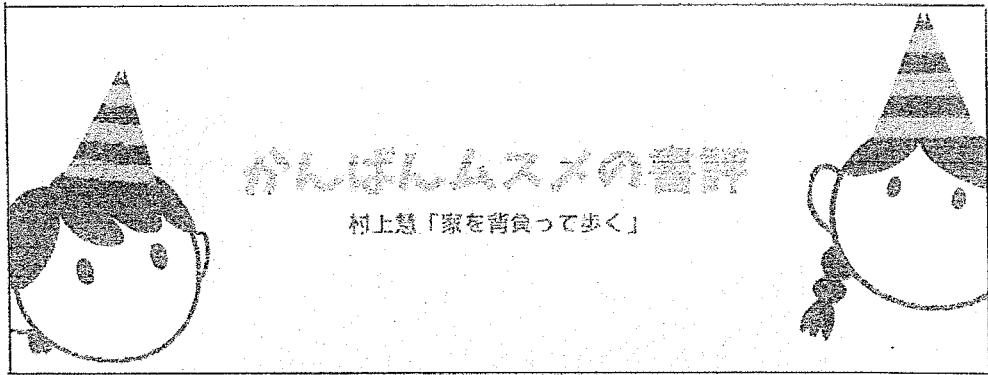
(太田一子)

夏だよ！

其枝なかよし文庫（京都市）

夏の音やにおい、手ざわりまでもが感じられそうな本をご紹介します。

<p>「なみ」</p> 	<p>スージー・リー/作（講談社）</p> <p>波とたわむれる女の子の様子が、青、黒、白の三色で描かれます。文章のない絵本。自由におはなしを作りながら、楽しんでください。</p>
<p>「あさがお」</p> 	<p>荒井真紀/文・絵（金の星社）</p> <p>あさがおの一生をあたたかみのある細密画で描く、ちしきの絵本。あざやかな花の色が美しく、空に向かってのびてゆく様子も格調高く印象的です。</p>
<p>「夏がきた」</p> 	<p>羽尻利門/作（あすなろ書房）</p> <p>朝からセミの声、食卓の麦茶、ひろがる青空、草いきれのおい…。「日本の夏」を子どもたちにもぜひ体験させてあげたい、と思わせてくれる絵本です。</p>
<p>「れいぞうこのなつやすみ」</p> 	<p>村上しいこ/作 長谷川義史/絵（PHP 研究所）</p> <p>「わたしも なつやすみを もらって、いっかい プールへ 行ってみたい」とれいぞうこが言い出した。関西弁の会話と豪快な絵で、ぐいぐい読ませる幼年童話です。</p>



### 家をせおって歩く

村上慧「家をせおって歩く かんぜん版」福音館書店, 2019.

この本は家をせおって日本全国を移動して生活している、村上慧さんが書いた本です。村上さんが背負っている家は、村上さん自ら発砲スチロールで作ったものです。昼間その家を背負って歩いている村上さんは、夜に家を置いて寝るために土地の持ち主と交渉し、その土地の一部を借りて寝ています。また村上さんはアーティストであり、各地の家の絵を描いてお金を稼いでいます。たまにお金が無くなると急ぎバイトをすることもあるそうです。

私はこの本が面白かったので村上さんのトークイベントに行ってみることにしました。実際に行ってみると、暗闇の中から白い家が歩いてきたのでおどろきました。話を聞くと、今の家は改良して少し大きくなったそうです。そして今村上さんは、鉢植えのブルーベリーを持ち歩いて育てていると話していました。しかし村上さんは、トークイベント会場にブルーベリーを置いていってしまったのでまた取りに来るそうです。

私はこの本を読んで村上さんの、細かい家の絵におどろきました。そして村上さんが家をせおって歩いている写真がかわいかったです。

※写真右は、村上慧「家をせおって歩いた」夕書房, 2017.

西尾詩  
島文庫の看板ムスメ(中学1年生)

今年出たばかりの絵本4点の紹介です。普段書店でのおはなし会活動が中心なので、新刊絵本のPRも兼ねて新刊絵本を主に取り上げ読んでいます。先日地元の小学校では、「おばあちゃん〜」「こくん」を読みました。子どもたちの目立った反応は、内容からして特にありませんでしたが、表情から心に響いていることがわかりました。



『おばあちゃん、ぼくにできることある?』

シェシカ・シェパード作/おびかゆうこ訳/偕成社 2019

『ばあばはだいじょうぶ』(楠章子作/いしいつとむ絵/童心社)

が、認知症を題材にした絵本として注目されている。この「おばあちゃん〜」も認知症という言葉は出てきませんが、孫の少年と忘れぽくなったおばあちゃんとのふれあいを描いた作品です。巻末には認知症の解説もあり、親子で読んで欲しい絵本です。



『地獄めぐりの橋』

青山邦彦作/小学館 2019

京都東山に「六道珍皇寺」(ろくどうちんのうじ)というお寺があり、そこには地獄へとつながる「冥途通いの井戸」があります。また千本通りには「千本ゑんま堂」もあり、お寺が多い京都だけに、地獄にことかきません。

なんですって、今の世の中「地獄」だらけですって!一度あなたもこの絵本で地獄めぐりしてはいかがかな?



『いちいちじゅうのもおくもく』

桂文我文/長野ヒデ子絵/BL出版 2019

落語の「寿限無」とならんでよく知られたおはなしです。字が読めない、すぐ忘れるでっちのかめきちが繰り広げる、楽しい落語絵本です。だんなさんに「平林」(ひらばやし)さんへ手紙を届けるように頼まれるのですが、すぐに忘れてしまい、道ゆく人に読み方を尋ねながら行きます。でも、どの人も読み方が違っており、困ったかめきちは…。



『こくん』

村中李衣作/石川えりこ絵/童心社 2019

主人公のちさとは身体に障害を持つ女の子。入院先の病院を退院して、つばき園に戻ってきました。不自由な身でありながら何でも自分でやりたいという強い意志を持っています。手助けはほしくないという時、ちさとは頭を「こくん」として周りの人に知らせます。障害のある人ない人、お互いの違いを認め合う世の中であってほしいと願う。

# クリスマスの絵本を集めてみました!

九条子ども文庫 杉本ひと美

## 「おじいちゃんからのこしたものは…」

マイケル・モーバーゴ文 ジム・フィールド絵 佐藤見果夢訳 評論社 2019



『小さな孫娘ミアへ 今年のクリスマスは、ミアにこの手紙を送ることにしました。プレゼントはたくさんもらうだろうし、手紙のプレゼント、ちょっとかわっているだろう?』で始まるおじいちゃんからのプレゼント…。時を経て、おとなになったミア。今年のクリスマスも家族で、ジングルベルを歌い、ケーキを食べて、プレゼントを全部開けたあと、おじいちゃんからの手紙を、みんなで読むんですって!! その手紙に書いてあることとは…!? ミアのことや、自然や、地球の未来のことまでもいとおしむ、おじいちゃんの思いが詰まった感動の一冊です。

## 「リトルサンタ」 丸山陽子作 BL出版 2019



ぼくには秘密がある。それはパパがサンタクロースってこと。パパとの毎日はとても楽しい。でもクリスマスはいつもひとりぼっち。そこで今年のクリスマスはパパと一緒に過ごせますようにと、一番星に願いをかけた。すると、クリスマスイブの朝、パパは足に大けがをした。さあ大変! 世界中の子どもたちがプレゼントを待っているというのに…。そこでぼくが考えたこととは…!? 小さなサンタの、大きな勇気と成長…! 心にジンとくるクリスマス絵本です。

## 「クリスマスツリーをかざろう」

パトリシア・トート文 ジャビス絵 なかがわちひろ訳 BL出版 2018



これは、本物のクリスマスツリーの作り方を教えてくれる本です。本物の木を選んで買うところから始まります。モミ、マツ、トウヒ…。のっぼの木、ふとっちょの木…。つんとしてる葉っぱや、つやつやのもの…。お気に入りの木を手に入れたら、かついででもいいし、車ででもいいので、なるべく早く持ち帰りましょう。部屋を片付けて、一番いい場所におきましょう。飾りを集めて…。素敵に飾るコツも教えてくれます。でも…その前に…! 楽しいクリスマスの夜にするために忘れてはならない大切なこと…! それは…!! この絵本を読んで最高のクリスマスを迎えましょう。

## 「せかいいちしあわせなクマのぬいぐるみ」

サム・マクフラットニイ文 サム・アッシャー絵 吉上恭太訳 徳間書店 2019



今から約60年前のこと。メアリー・ローズという女の子がおこずかいをためてクマのぬいぐるみを買いました。「ウーウー」と名前をつけて、どこに行く時も一緒というくらいかわいがっていました。ところがある日、メアリー・ローズはウーウーを電車の中に忘れてしまったのです!! 一生懸命に探しましたが見つかりません。それからウーウーは何人もの子どもたちの間を転々として…。時がたち、クリスマスが近づいたある日のこと。年をとった女の人がだんなさまとアンティークショップにやってきました。そしてそこでまさかの奇跡が…!! 心がほんわかあたたまる、素敵な絵本です。

## さむい日に読む絵本

～こころ ほっこり あったかく～

個人会員 白倉弘美

私は、小学校で学校司書をしています。季節にかかわらずいろいろな絵本を読みますが、この3冊はやっぱり寒い日に読むと、より楽しめます。



### 「雪のおしろへいったウッレ」

エルサ・ベスコフ/作 石井登志子/訳 徳間書店

北欧の冬はこんな感じなのかと、京都育ちの私には憧れのようなわくわくした思いを抱かせます。新潟出身の友人はこの絵本を評し、春が少しずつやってきて、雪が溶け始めじくじくする感じが、わかるわかると言っていました。私のように知らないが故の「憧れ」か、実感からの「共感」かは、交流すると面白いです。

春の訪れとともに現れる「雪どけばあさん」が、なんともよい味を出しています。最後の大変身にはびっくりです。



### 「さむがりやのゆきだるま」

三田村信行/作 おのかおる/絵 小峰書店

何をしても「さむい、さむい」という雪だるまを、なつこは家に連れ帰り、おうどんを食べさせたりお風呂に入らせたり奮闘しますが…。雪だるまは、少しずつつけて小さくなっていきます。雪だるまが寒がるという意外性が、最後まで話をひっぱっていく三田村さんらしい面白い発想です。学校で子どもたちに読むと、お父さんがお酒を飲ませるところで、みんな必ずえ～！と驚きます。

でも、あったまるんだよねえ。寒い日に熱燗って。



### 「ふきまんぷく」

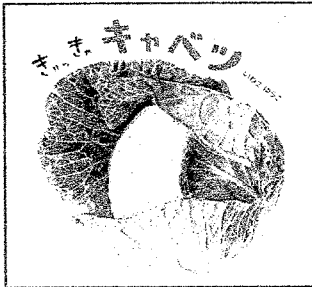
田島征三/作・絵 協成社

この絵本は四季折々を描いたものだから、寒い時期だけにぴったりの本ではありません。でも、藍の芽が顔を出すのは、やはり寒い冬をしっかりと過ごすから。だから、今の時期に読みたいのです。ふきちゃんの表情が生き生きしていて、学生の頃に初めて出会って以来、私はこの絵本が好きです。夫の両親が長野出身で、蒨味噌や蒨の天ぷらなどの美味しさを知ってから、植物の蒨そのものも大好きになりました。

でも、今の子どもたちは自分ではまずこの本は手に取りません。私は読む時は、根雪の残る長野の街並みや蒨の美味しさにも触れながら、何か感じるものがあつたらいいと願いながら読みます。

## 『きやつきやキャベツ』

いわさゆうこ さく 童心社

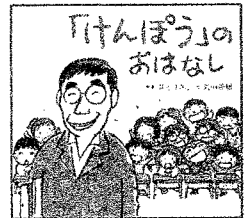


年中スーパーマーケットやお店にならぶキャベツ。キャベツをながめていると、どうやって食べようかとまようけれど、とりあえず買っておけば何か作れる。そんなキャベツを一枚ずつ葉をめくっていくと、どうなる？

料理の素材としてしか見ないキャベツも、畑にそのままおいていれば、あれあれ花が咲きましたよ。

## 『「けんぽう」のおはなし』

原案・井上ひさし 絵・武田美穂 講談社



「憲法改正」という言葉をマスコミが使うようになり、あたかもそれが私たちに幸福をもたらすかのような《イメージ》を作りだしています。この本でいちばん言いたいことは、「けんぽう」とは、国の政府が守らなければいけないきまりであり、それは大きな力を持つ政府やそこにかかわる人たちが、その力を利用してすきかってなことをしないために作られたものです。だから、大きな力を持つものが、その力を抑えている「けんぽう」を変えたいと思うのは当然のことです。大きな力を持たない私たちがそれを見過ごしてよいのでしょうか。「けんぽう」が私たちの生活と別のように思ってしまう大人にも、井上ひさしさんはやさしく語っておられます。

## 『ドームがたり』 アーサー・ビナード作 スズキコージ画 玉川大学出版部



1915年にヤン・レツルというチェコ人の建築家によって建てられた「広島県物産陳列館」は、30年後の8月6日の朝「ウランのつぶつぶ」その上でわれました。建てられてすでに100年を過ぎているその「原爆ドーム」は、名前をまた変えられながら、目に見えない放射能という「カケラ」を心配しています。お金儲けのために、また「カケラ」を作りだしていくおとなたちは、みらいの子どもことは考えていないのです。ドームは今日も生き物のいのちを感じながら、この世界を心配そうに見ていてくれます。

## 旅立ちに おくる本



かんりん文庫 梅崎 百合子

7月にスタートした文庫は、まだ大人の方が多いい日もあります。同級生のサロンになることも多いですが、自分の借りた絵本についていろいろと感想を聞かせてくださる方もいて、みんなで、「へ〜」「ほんとだ」と話がはずみます。

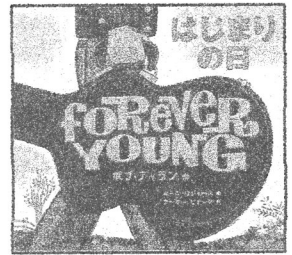
### 「生きる」谷川 俊太郎/詩 岡本 よしろう/絵 福音館書店 2013年

小学校の教科書にも出てくるのですが、岡本さんの絵が入ると、一気に昭和にタイムスリップします。最初のページで、セミの死がいにも群がる蟻、を見つめる男の子。この子とその家族の生活が各ページにあって谷川さんの「いま」が自然界から、人間のぬくもりに行きつきます。



### 「はじまりの日」ボブ・ティラン/作 ポール・ロジャース/絵 アーサー・ビナード/訳 岩崎書店 2010年

原曲は「Forever Young」。ネット訳は「いつまでも若く」なので、このタイトルに最初は違和感がありました。でも、自分の子どもが誕生した時につくった曲だと知り、絵本の中の笑顔のこどもにはこれでいいのだと納得。ティランといえば片桐ユズルの訳詞が絶対！という世代なので、あちこち探しましたが見つからず、残念。



### 「世界を救うパンの缶詰」菅 聖子/文 やました こうへい/絵 ほるぷ出版 2017年

食べ物を発明する話が大好きです。もちろんチキンラーメンも。食は命ですからね。成功するまでにどれだけの失敗を重ねたか、ということを知ると元気をもらえるし、規模の大小に関わらず、企業の社会への貢献度は子どもたちに知ってほしい。何より、宇宙へ行くパンの缶詰なんて、おとりよせしたくなるじゃありませんか。



### 「いきのびる魔法-いじめられている君へ-」西原 理恵子/著 小学館 2013年

「うそをついてください」こんなキッパリとしたアドバイスが子どもの心に届くのか、届けていいのか、と迷うところではありますが、極限まで追いつめられた人にはきっと救いになる西原流の愛だと思えます。

